

岡崎地域活性化の取組について ～これまで、そして、これから～

はじめに

平成23年3月に策定された「岡崎地域活性化ビジョン」は、岡崎地域の50年後、100年後を見据え、「創造する文化芸術の都」、「歩いて楽しい祝祭と賑わいの空間」など、5つの将来像を設定し、これらの将来像を実現するため、概ね10年間を取組期間として取り組む7つの方策を掲げた。

また、当協議会は、「関係者の積極的な参加の下、役割分担と合意形成を図りながら、岡崎地域活性化ビジョンを推進し、岡崎地域の魅力向上に資する」ことを目的に、官・民・地域が参画し、平成23年7月にエリアマネジメント組織として設立された。

本年3月にビジョン策定から10年となることを1つの節目として、これまで協議会と市が両輪となって進めてきた様々な取組や、今後取り組むべきことについて、7つの方策に基づき確認するものである。

方策① 岡崎のエリアブランドを構築し、世界に向けて魅力・情報を発信

協議会として、京都岡崎コンシェルジュ、岡崎手帖、京都・岡崎年代史、シンボルマーク、岡崎市電コンシェルジュなどの様々なチャンネルを通じて情報発信に取り組んできた。こうした岡崎の魅力・情報の発信により、岡崎のエリアブランドが一定構築されてきた。

今後もこれらを活用し、継続して、世界に向け、魅力あるコンテンツや新鮮な情報の発信を行う。

方策② 山紫水明の岡崎の魅力を創出する琵琶湖疏水と近代化遺産の保存と活用

平成27年10月に「京都岡崎の文化的景観」が国の重要文化的景観に指定された。また琵琶湖疏水については、平成30年2月より、琵琶湖疏水通船が本格運航を開始し、令和2年における「日本遺産」に認定されるなど、本エリアの文化的景観が持つ魅力の更なる向上と次世代に向けた継承のための下地ができつつある。協議会としても長年「岡崎桜回廊ライトアップ&十石舟めぐり」に取り組んできた。

今後も、本エリアの文化的景観の価値を保存するだけではなく、創造的な視点を加えた承継につなげていく。

方策③ 文化芸術、MICE拠点としての機能強化

ビジョンの策定以降、京都市動物園、ロームシアター京都、京都市京セラ美術館などの各施設の再整備が順次完了し、開館を迎えている

今後も、当該エリア内にある官民多様な施設が機能強化を図りつつ、施設間が連携し、エリア全体として、文化芸術拠点としての機能を確固たるものとする。

方策④ 地域資源を結び、岡崎の総合的な魅力を高める、保全・創造の景観・まちづくり

特別用途地区建築条例、地区計画、風致地区特別修景地区の指定などの都市計画の変更や、歴史まちづくり法重点区域追加認定などの制度の整備により、神宮道・公園の再整備、各施設のリニューアル、岡崎ループの運行開始によるアクセシビリティの向上など、魅力的な都市空間づくりに向けたエリアデザインを進めてきた。

方策⑤ 多くの人が訪れたいくなる新たな賑わい創出

協議会の主催により、京都岡崎レッドカーペット、岡崎ときあかり、岡崎桜回廊ライトアップ&十石舟めぐり、星の饗宴など、多くの賑わい創出イベントを実施してきた。これらのイベントや、協議会が定期的に開催している幹事会を通じて、地域の施設や事業者間の連携が強化されてきた。さらには、岡崎公園を中心に、様々な事業者を本エリアに呼び込み、各施設との連携をコーディネートするなど、多彩なイベントが展開できる、オープンな賑わい空間の創出に取り組んできた。

今後は夜間も含めた一層の賑わい創出が必要であり、ウィズコロナ社会にも適合しながら、各施設や事業者が引き続き連携して取り組んでいく。

方策⑥ 環境モデル都市を牽引する進取の取組の実践

本エリアにおいては、疏水沿いの桜をはじめとした緑の環境の継続的な維持管理や、公共施設間のエネルギーネットワークに係る実証実験などを行い、また協議会としても自然や生態系をテーマにしたまち歩き講座を実施してきた。

今後も全市的な環境保護施策を踏まえ、各種取組を展開する。

方策⑦ 集客・国際観光拠点としての機能強化

協議会として、総合情報サイト「京都岡崎コンシェルジュ」の運用や、来訪者向けの情報提供と案内システムの構築を目的とした「岡崎手帖」の発行などを通じて、岡崎地域の総合的な観光案内に取り組んできた。

今後も、スマートフォンの普及などの技術革新や、ウィズコロナ社会の到来など、社会情勢の変化に柔軟に対応しつつ、国内外からの来訪者がエリアを気軽に周遊し、魅力を享受できるよう、これらの取組を継続する。

おわりに

このように、協議会として、地域の施設や事業者間の連携強化、魅力ある事業の企画調整、効果的な情報発信などに取り組んできたことで、岡崎地域の魅力が広く認知され、またさらに向上し、本エリアへの来訪者が大きく増加^{*}するとともに、民間事業者等による、岡崎公園をはじめとした地域資源、施設の活用が活発化するなどの成果が結実している。

また、定期的な幹事会の開催や、協議会主催事業を軸に各施設が連携イベントの企画・調整を重ねてきたことで、施設間連携の経験やノウハウが蓄積されており、施設間のみならず、民間事業者をも巻き込んだ多様な事業者による相乗効果が生まれるような土壌が醸成されている。

上記の成果を踏まえ、今後も、ウィズコロナ社会にも適合しつつ、協議会・幹事会のつながりを密にし、各施設や事業者の連携による更なる賑わいづくりや、地域の魅力・情報の発信など、より一層の活性化に向けた取組を継続することで、「世界の人々が集い、ほんものに出会う、京都岡崎」を目指す。

※ビジョン策定当時の年間延べ500万人から、平成28年度には、695万人にまで増加した（協議会調べによる）。なお、令和元年度に関しては美術館の再整備等により、593万人となっている。